

## ボッティチェッリ作《ラーマ家祭壇画》再考

江尻育世（京都大学）

1470年代前半、ボッティチェッリは、フィレンツェの最も重要な教会の一つであるサンタ・マリア・ノヴェッラ教会のラーマ家礼拝堂のために《三王礼拝》、通称《ラーマ家祭壇画》（ウッフイーツイ美術館蔵）を描いた。本作品についてはR.ハットフィールドの基礎的研究（1976年）がある一方、これまで着目されてこなかった重要な問題が二点指摘できる。

一つは図像学上の問題である。「三王礼拝」を主題とする絵画は、イタリアでは1400年代初めまで、玉座につく聖母子を画面片端に配し、三王が幼子に向かって進み礼拝する横長の構図が一般的だった。このような伝統的な描き方とは異なり、《ラーマ家祭壇画》では粗末な小屋を背景に、中央に聖母子、それを取り囲んで三王と従者達が配される。この新しい図像の萌芽は1420-30年代に現れ、1480-90年代に主流となる。本発表で注目する、入念に描きこまれ存在感を放つ「建物の隅部分の残骸」も、こうした変容の中で新たに取込まれた図像の一つであり、「キリストは隅石 (*pietra d'angolo*) である」という聖書解釈（使徒 4:11）に基づく表現と考えられる。1300年代末、「降誕」場面に上部の欠損した建物が登場し始めるが、これは、ギリシア語版新約聖書で *angolo* に相当する言葉  $\kappa \epsilon \phi \alpha \lambda \eta \eta$  が、「頭、上部、先端」を含意するのに由来する。一方、1400年代後半、上部欠損ではなく、崩れ残った建物の隅部分を強調する表現が現れるが、これは *angolo* を文字通りに解釈したものと推定される。隅石の表現が「交差する壁から成る建物の隅」として表されるようになったのは、「キリストは羊飼いが象徴するユダヤ人と、三博士が象徴する異教徒を束ねる隅石である」という聖アウグスティヌスの言説に基づき、直交する2枚の壁を結ぶ隅の石にキリストを仮託したためと推測される。本作品には「隅石」の他にも「平和の神殿」等の新規なモチーフも登場しており、こうした工夫を通じて、画家は祭壇画にふさわしい威容と宗教的重層性を作品に与えたことを指摘する。

第二の問題は肖像表現である。本祭壇画はメディチ家の成員の肖像が登場することでも知られ、通説では、第一の王がコジモ・イル・ヴェッキオ、第二の王が嫡男ピエロ、第三の王が次男ジョヴァンニ、第三の王の背後の若者が孫ロレンツォとされる。本発表では、肖像彫像やメダル等との比較と、三王の呼称に関する精査を通じ、注文主ガスパッレ・デル・ラーマと同名の王が、従来推定されてきた第三の王ではなく、コジモの肖像が投影された第一の王であり、祖国の父コジモに対する強い礼賛の念が込められていることを新たに示す。

以上、《ラーマ家祭壇画》は祭壇画としての宗教性を追求しつつ、注文主の社会的立場の表明と自己顕示の役割を満たすべく巧みに工夫された、ボッティチェッリ初期の意欲作であると位置付けられる。